

---

# 新皇帝リン・ヤオ

アステカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新皇帝リン・ヤオ

### 【Nコード】

N0715V

### 【作者名】

アステカ

### 【あらすじ】

東の大国シン。リン・ヤオはついにその国の頂点、皇帝に即位した。しかし、リン・ヤオの前途は決して明るいものではなかった。一体シンはどうなってしまうのか？  
どうにもなりませんけどね…。

## 〈異質な皇帝〉（前書き）

鋼の錬金術師の最終回に、リン・ヤオが皇帝に即位していましたよね。でもあんな性格の皇帝って、臣下から見れば異質で、対応しづらいと思うんですよ。それで、臣下視点でこの小説を書いてみました。小説を書くのは初めてなので、間違いも多いと思いますが、どうかよろしくお願いします。

## 異質な皇帝

「皇帝陛下万歳!!」

声が宮殿中に響いた。先帝の第十二皇子だったリン・ヤオが、今日、皇帝に即位したのだ。他の王族の者たちは、悔しそうだったり、絶望の顔をしている。悔しそうな顔をしていたのは、不老不死の手掛かりを持ち帰れば確実に皇帝に即位できる家柄と財力、権威を有していた者たちである。絶望の顔色をしている者たちは、我らがシン帝国に貢献しなかった者たちは、害されると聞いているだ。しかし、そんなことは知らないかのように、新たな皇帝陛下は宮殿で宴会を開くので、全員出席するよう言い残して、即位式は一時解散となった。私の名はチャン・クエン。先帝の時代には副宰相の位にあった者だ。今度、私は宰相に任ぜられると噂されていて、私自身もそう予想しているが、今回の皇帝は手を焼きそうだ。いやな予感がする。皇子は五十人もいたので多くの臣民たちは今度の皇帝のことを知らないかもしれないが、今度即位したリン・ヤオの人柄は聞いたこともあるし、調べていて知っている。仲間を非常に大事にし、「民の上に王が立っているので、王は民のために尽くさなければならぬ」という、帝王学とま逆の思想を持っている。武術を心得ていると聞くが、そんなもの、皇帝の位にあつては役に立たない。あえて言おう、カスである！武術ができて、政治や謀略ができなければ意味はない。おぼっちゃま体質よりはましかもしれないが・・・。問題はその思想だ。今までの政治において、仲間を見捨てるのも、臣民を見捨てるのも常識だった。それをこれから受け入れてくれるかどうか、不安だ。下手なことを言って逆鱗に触れ、打ち首にされるかもしれない・・・。

## 宮廷の休憩（前書き）

楽屋裏

リン「オレは今回、一回も出ないらしいな。」

ランファン「若、いや、陛下。ご安心ください。次回は出るそうですよ。」

エド「オレ達の登場もあるのか?!」

アル「兄さん、それは望み薄だよ。なんたって、作品名が「新皇帝リン・ヤオ」なんだから。」

エド「なんだってえ！でも「鋼の錬金術師」の二次創作に鋼の錬金術師が出て来ないなんて、おかしいじゃないか?!」

リー「西方の人間はうるさいのう。」

クエン「まったくアルよ。」

エド「………アル?!」

## 宮廷の休憩

「ふう、出れた。」即位式会場から出て来たチャン・クエンは呟いた。次の宰相になる可能性が高いので、色々な人物に声をかけられて疲れるのだ。しかしそんなことされても、翌日には忘れてしまう。「すみませんが、どなたでしたっけ？」という言葉だけでも彼らは欲しいのだろうか？

そう思いながら、厠に向かっていると、

「お、クエンじゃないか。」

と声をかけられた。声のした方に視線を向けると、そこには友人のリー（リー・ズオ・ジェア）がいた。

「どうした？浮かない顔だな。次期宰相の最有力候補だというのに。リュ家の誰かに一族になることでも勧められたか？」

「まあ、そんなところだ。」

リュ家とは、今のところシン国で1番勢力の大きい一族だ。姓が同じでない者も傘下にし、多くの閣僚に入り込んでいるという。呂家は先代の皇帝が寵愛した妻の一族だ。先帝はあまり女性に関心が無かったが、たつた一人の正妻だけは愛した。なにせ、彼女に推薦された2、3人の人物は、結構な地位を手に入れたのだから。他の49人の側室達は、まあ、あまり愛されなかったらしい。しかし、そのせいでリュ家は異様に力を持つし、最後には「朕は永遠の命が欲しい。不老不死の薬を探してまいれ。」などと狂言を吐くし、踏んだり蹴ったりな治世だった。まさに暗君だった。先帝と正妻の間に子供が出来なかったことと、ヤオ・リンが不老不死の鍵っばい赤い石を持ってきたのが、唯一の救いだ。さもなければ、呂家の天下になっただろう。しかし、あのヤオ家の新帝は、どれだけ肅正するのだろうか？まさか、逆に反乱や暗殺を起こされそうなりリュ家を肅正はしまい。チャン家辺りが潰されるだろう。参政を許されず、農奴階級になるだろう。

しかし、この制度は危険だと思う。一度といえど権力を手にした人間が、権力を取り上げられたら、人はどんな手を使ってもそれを取り戻そうとする。今に始まったことではないが、これ以上宮廷が怨みを買うのもなあ。以前、先帝に上奏文をしたためたが、「慣習だ」と、軽くあしらわれた。

潰すとしたら、上層部を皆殺し？

クエンはリーの方にゆっくりと振り向いた。

「ヤオ・リンをどう思う？いや、別に深い意味はないのだが。何家ぐらい潰されるのかなあ、と。」

リーは急に言われたので少し驚いた様子だったが、

「いきなり呼び捨てか？お前は本当に忠誠心がないな。せめて陛下を付ける。」

と苦笑しながら言った。

「お互いさまだろう。ただし、私はお前とは違う。忠誠心が無いわけではない。個人に対して忠誠心は無いが、国家に対してはあるぞ。ただ、あんな18歳くらいの若造を、「陛下」と呼びたくないだけだ。世襲の極みだ。あの新帝は。大して皇帝の能力があるわけでは無いのに、筋肉ムキムキで、運良く変な赤い石を持って帰って来て、あの暗君のご機嫌をおとりになっただけで、皇帝にならせられたのだからな。」と、変な具合に敬語を入れた。

「おお、やれば出来るじゃないか。その調子だ。」

リーはまた苦笑した。

「お前もそう思わんか？たかだか武芸が達者な18くらいの若造が皇帝だぞ？長い間シン国に仕えてきた私達から見れば、有り得ないだろう？」

私は国家に忠誠を誓ったのであって、個人に忠誠を誓ったわけではない。もしヤオ・リンが先帝のような暗君で、私に力があれば、たとえ皇帝であつても倒すかもな。」

リーは驚いていった。

「それ以上言うな。ここは宮廷だぞ。誰が聞いているかわかったも

のではない。これからはそんな話は公な場所ではないことだ。そんな話はプライベートでしろ。あと、「陛下」を付ける。」

「そんなことはわかっている。お前しかいないから、喋っただけだ。・・・それにしても、お前に注意されるなんて、私も墮ちたものだなあ。」

「なに、大分前からそうさ。」

またリーは苦笑しながら言った。

「だがリーよ。私はお前より高い地位にいるぞ？これはおかしいのう？」

まあ、現実には常に厳しいものだよ。リー・ズオ・ジエアどの？」

「ほう？さつきまでお前が非難していた、この国の評価が正しいと？また、この世の中で、人が才能に応じた地位をちゃんと貰えると思っているのか？」

さすが次期宰相。私には劣るとも勝らないその見識。恐れ入ります。

「リーは苦笑しながら頭を下げた。

「もうやめよう。くだらない。」

今度はクエンが苦笑している。

「まあ、あれだ。国益になれば、どんな皇帝でもいいんだ。」

クエンは話をすごい勢いで変えた。

「お前は「国益」「国益」というが、お前にとっての「国」とはなんだ？」

「私にとっての国とは、「私にとっての国とは、シン国全体のことだ。下も上もない。総合的なものだ。だから、少ない者達が犠牲になることで、より多くの者達が利益を得るなら、私はそれを正しいと思う。」

「そうか。私にとっての国も、シン国全体のことだ。しかし、シン国の中で少数派だ。多数派だ。というのはおかしい。私達は臣民の税で養われている。その者達に害を与える決定など、私にはできん。」

少し経ってからクエンが

「理想論だな。誰もが納得する政治など、ありはしない。結局、なにかを基準に決定を下すことになるんだ。」

「・・・そういえば、新帝陛下も理想論の気があるらしい。」

「そうらしいな。だが、理想論は決して悪いものではないぞ。人は理想を目指して進む。たとえ目標に辿り着けなくても、そこに向かうまでが「進歩」と言われるのだ。」

「そうかもな。だが・・・」

「おい、もうやめにしよう。きりがない。」  
「リーが止めた。」

「それもそうだな、と思い、クエンも話すのをやめた。」

「で、私は最初に何を尋ねたのだったけ？」

クエンが聞いた。

「・・・私も思い出せん。」

「・・・」

「・・・」

「おお、そうだ。新帝陛下をどう思うか、聞いてきたのだった。」

「おお、そうだったな。」

「・・・なんで途中から変な話になったんだ？どこから脱線した？」

「お前が世襲について話したから脱線したのだ。」

「リーが苦笑しながら言う。」

「私のせいだと？お前が「陛下を付けろ」とやかましいから脱線したのだ。」

「いやいや、お前が・・・」

「おい、もう時間ではないのか？」

「お、本当だ。これはまずいのう。では、さっさと行くとするか。」

クエンとリーは足早に歩きだす。

「そういえばクエン、お前は国益ならん人間は政治にいらん、と言っていたな。」

「ん？まあ、そうだったかな。」

「それは引退宣言か？クエン。あまり、変なことを言うな。笑えて

くるぞ。」

「・・・なあ、リー。アドバイスをしておこう。」

「なんだ？」

「これから宰相に「お前」はやめる。あと、宰相の機嫌を損ねるな。後が怖いぞ。」

「・・・かしこまりました、宰相。」

宮廷の休憩（後書き）

作者「なんだこの、ほのぼのとした話はー！」

バキッ！

クエン「ぶへえ！」

## 食（前書き）

### お詫びと訂正

前回、未編集の作品を投稿し、35名の方々にご迷惑をおかけしてしまいました。まことに申し訳ありませんでした。間違いを訂正しておいたので、見ていただければ幸いです。

クエン「どのようなところが間違っていたのだ？」

作者「そうだな。具体的に言うと、

不必要な文の連発。

クエンとリーが一般人出になっている

リーの名前が李左車になっている

などかな。」

リー「それはひどいのう。私の日本語名がバレってしまった以前に、

読者が混乱するではないか。」

クエン「一般人出が宰相になれるものか！」

作者「なれるさ！オスマン帝国では、小姓が宰相になったし！やろうと思えば出来るんだよ！」

リー「でも、間違えたのだろうか？」

作者「……すみませんでした。」

李左車：項羽と劉邦の時代に出て来た人物。項羽を騙し、戦場に誘い出した。その戦場とは、「四面楚歌」の基になった「ガイカの戦い」の戦場である。

クエン「くだらねえウンチクで紛らわすな！」

作者「ひええ！すみません！」

## 食

リー「のう、クエン。」

クエン「なんだ？」

リー「おぬし、前回まで「私のことは「宰相」と呼べ。「などとぬかしていたが、今日、任命されなかつたら痛すぎるぞ。」

クエン「……………な、何を言ってるのかなあ、貴殿は？」

リー「冗談だ。任命されるさ。」

再び臣下達が宮廷に集結した。

「皆のもの、今日はよく集まってくれた。」

新帝が臣下達に呼びかけた。

皇帝は宗教上重要なので、神聖さを出させるため、絹の垂れ幕やらで大抵顔を隠している。

「今宵はめでたい日だ。今日ぐらい私は顔を見せようと思う。」

それを聞いた臣下達は「おおっ」と、歓声を上げた。

「いやはや、ご尊顔を拝見できるとは、ありがたいことだ。」

「今日ほど幸運な日はあるまい。」

などと言つ者達がいる。  
それを聞いたクエンは「ホントにそう考えていたら気持ち悪いな。  
コイツら。」と思ひながら、  
「いやはや、我等のような者達にはもつたいなさすぎるわい。」と  
話すのであつた。

「垂れ幕を上げよ。」新帝がそう言つと、近従の一人が動き、垂れ  
幕がスルスルと上がつてゆく。

「ついに顔が」一同が固唾を呑む。  
しかし、そのご尊顔は、大量に積み重なつた皿で見えなかつた。  
それどころか、殿上の至る所に空の皿が山となつている。

「即位はすんだ。」

ムシヤ

面倒な儀式はもうない。

モグッ

今宵は皆で

ゴクッ

楽しもうぞ。」

しかもまだ食つとる!!

また新しい皿がカチャリと積み重ねられた。

「どうだ？私の顔は?!我ながら惚れ惚れとするのだが。・・・な  
んてな。」

いやいや、顔、見えてませんから!

リン「……………なあ、ランファン。」

ランファン「はい、陛下。」

リン「何故誰も何も言わんのだ？」

ランファン「おそらく、皿で顔が見えないので、どう反応していいかわからないでしょう。」

リン「おお、そうか。でも、一応片付けたんだぞ、これ。」

ランファン「ただいま片付けます。しばしお待ちを。」

リン「皆のもの、すまぬ！いましばらく待ってくれ！……………  
……………まったく、慣れない言葉遣いで舌を  
噛みそうだ。」

小声でランファンに呼びかけたが、そこにはもうランファンはいなかった。

「さきの即位式で大量に料理が残ってたから、もったいないと思っ  
てな！ついつい手が出してしまった！」

臣下達に呼びかけたつもりなのだが、誰も応えてくれない。

リンは少しだけ冷や汗をかいた。

「……………皆のものに料理を。」  
それを聞いた近従がすぐさま動き出した。

ふたたび垂れ幕が下がる。奥でカチャカチャと皿を片付ける音が聞こえる。

その時間の埋め合わせか、料理が奥から出て来て、並べられている。

クエン「なあ、リー。」

「ん？」

「私は、もう宰相になれなくていいや。」

「つとていじり、なりたくない。」

「ちつきも言ったろ。なれるぞ。」

「……………トホホ。」

食（後書き）

クエン「私はチャン・クエンだが、メイ・チャン（チャン・メイ）のチャン家とは別のチャン家だからな。発音が微妙に違う。・・・という件事にしておいてください。」

リー「ついでに、私はリー家の人間だ。」

## 閣僚発表（前書き）

作者

「以下のは重要官僚の説明などです。  
秦の構造を模倣にしましたが、所々変えています。」

皇帝

シン国の頂点に君臨する者。国内においては「皇帝」。国外においては「天子」と称する。

宰相（丞相）

民政を中心とした政治の最高職であり、皇帝を助けて万機を総覧する。

副宰相（御史大夫）

宰相の補佐役。

大司馬

軍事を司る。文民である。

大元帥

大司馬の配下で、実際に軍を指揮する立場にある。文民でなくともよい。

大司農

国家財政を司る。

廷尉

法の執行を司る。

大行令

外交を司る

皇帝の家政機関に分類されるもの

郎中令

郎中令は主に皇帝の身边警護を扱い、それ以外の皇帝の身边に関することも扱う。衛尉の上司。

衛尉

宮中警備・防衛。

首尉

首都安長の警備・防衛。

## 閣僚発表

ついに閣僚発表が行われた。

そして、以下のがシンを構成する者達である。

皇帝：ヤオ・リン

宰相：チャン・クエン

副宰相：チュンホウ

大司馬：リュ・ミン

大元帥：バイチー

大司農：レ・ズアン

(トベナム人)

廷尉：リン・チャンミン

大行令：イブン・サハド

(ウグイル人のイシュウ、アラ教徒)

郎中令：ランファン

衛尉：ソツイン・ガンポ  
(ベチット人)

首尉：チエン・シオン

トベナムとは、シンの南にある熱帯の国である。シンの属国ではあるものの、シンや他国の軍事進行をいくつもはねのけた歴史がある。

ウグイルとは、シンの北西にある乾燥した国である。国土の多くが砂漠に覆われている。シンの属国である。多宗教の国だが、十年以上前に大量の「イシュウ」アール難民」が国境を越えて入って来たため、イシュウ「アール教徒が急増。それによっていくつかの社会問題を抱えている。アメストリスとは国交断絶状態。

ベチットとはシンの西にある寒冷な山岳地帯の国。シンの属国である。戒律の厳しい「ベチット教」を信仰している。

クエン

「宰相に……なった。」

リー

「よかったのう。これで晴れてこの国のナンバー2だ。」

クエン

「そうだな！そう考えれば楽だ！誰も私に逆らえない。私はこの国のナンバー2だ！」

リー

「表面上ではな。」

## 閣僚発表（後書き）

クエン

「え？今回はこれで終わりなのか？」

作者

「そつだ。仕方ないだろう。オレが好きな中国人の名前をカタカナにしたり、中国語読みを調べたり、結構大変だったんだ。」

リー

「「秦を模倣」といつとるが、「Wikipediaの模倣」の間違  
いではないのか？」

作者「いや、Wikipediaが偉大すぎて、ついつい手を出  
して

しまう。」

クエン

「わかっていると思うが、

トベナム＝ベトナム

ウグイル＝ウイグル

ベチット＝チベット

と考えればいい。」

リー

「しかし、こんな紛らわしい名前を書いて大丈夫なのか？現実世界  
で「ベチット」とか間違えてしまう者が現れるかもしれん。」

クエン

「そんなのいないだろう。」

作者

「いや、今日の世界史の問題、「ソントゥエン・ガンポ」を「ソツイン・ガンポ」と書いてしまったような……。」「ソツインは間違えてる」としか覚えてなくて、本当の名前が思い出せんかった。」

クエン

「！」

## リュ家のみなさん（前書き）

リュ家の人達の会談です。

夜で、暗い部屋をイメージしてください。

## リュ家のみなさん

宮廷のある部屋にて

リュ氏 A

「とりあえず大司馬に リュ・ミン を据えて、軍事は抑えたな。」

リュ氏 B

「あやつには少し荷が重いのではなかったかのう？」

リュ氏 C

「座っているだけだ。問題ないだろう。」

リュ氏 D

「他にも抑えてある部署に、何故リュ氏の人間を据えなかったのだ？」

リュ氏 E

「モグモグ・・・」

リュ氏 A

「派手にやると後々面倒になる。特にあの新帝は、ここ4、5年シ  
ンに不在だったからな。我が一族の権力を実感されて、警戒されて  
は困る。」

それに据えた者達は、姓は違えど我がリュ家の人間だ。裏切る心配  
はない。」

リュ氏 B

「これからチャン家などが潰されるじゃろうな。我等の権威をさら

に高めることとなる。ありがたいのう。  
チャン家への支援についての交渉はどうなったのじゃ？」

リュ氏C

「成功だ。潰されると覚悟していたようだな。すぐに食らい付いたぞ。」

「もし潰されたあとに再興を支援してくれるなら、廃嫡でも新たな王朝を建てるのでも、喜んで協力いたします。」

リュ氏D

「ほう。そうだったのか。節操がないなあ。そこは

「愚か者め！家は廃れたが忠誠心はまだ廃れとらん！」

とか言つて、切りかかって来るものだろう。

なあ

？」

リュ氏E

「ムシャムシャ……」

リュ氏A

「これからはヤオ家と諸家の動向が気掛かりだ。我等と手を結ぶのか、敵対するのか。」

リュ氏C

「どちらにせよ結果は決まっているだろう。」

我等の勝利だ。」

リュ氏D

「皇帝の玉座は、すでに見えている。」

リュ氏B

「甘いのが。調子に乗りおって。そのうち痛い目にあうぞ。これだから人生経験の少ない者達は。」

フガフガフガ（笑）」

リュ氏E

「ふゝ、食った食った。」

リュ氏C

「あ！おぬし、もうほとんど残っておらぬではないか！」

リュ氏E

「だから「食った食った」と言っただろう。」

リュ氏D

「ふざけるなあ！オレはまだ箸すらつけてないんだぞ！」

リュ氏E

「遅い者に、食べる資格無し。」

リュ氏B

「まあまあ、方々、騒ぎ召されるな。」

こちらにワシが持参した民族料理があるので、それでもお食べなされ。

おい、こちらに持ってきておくれ。」

ドン！ドン！ドン！

リュ氏C

「おお！これは！………この民族料理ですか  
な？」

リュ氏B

「「スシ」という、東方の「ワ国」の食い物じゃ。  
酢飯の上に生魚を載せ、調味料をつけて食うのじゃ。」

リュ氏D

「え？ではこれは魚？生の？  
うえ〜、いくらお勧めされても、生の魚を食う気にはならないな  
あ。」

リュ氏B

「まあまあ、そついわずに食べてみなされ。結構美味ですぞ。」

リュ氏D

「ぐえ！無理矢理食べさせないでくださいよ！」

リュ氏E

「お、旨そうだ。少し頂こう」

リュ氏C

「おぬしはもう食わんでよい！」

リュ氏E

「ぐああああ！鼻があああ！舌があああ！  
水！水！水！」

何なのだ、この緑色の香辛料は！」

リュ氏 B

「たわけ！「ワサビ」をそんなに塗るやつがおるか！醤油も付けるのじゃ！」

リュ氏 A

「・・・ふむ。まあ、まずはありませんな。しかし言いわけでもない。まさに珍味。」

リュ氏 E

「うおえ。生魚が・・・。  
食中毒になってしまふ。何のために人類は火を使ったと思っているんだ。」

リュ氏 C

「ワ国・・・。たしか、我が国の属国である「鮮朝」の少し南にある島国？でしたかな。数世紀前に統一され、鮮朝に軍事進行をし、破壊と略奪の限りを尽くしたという。  
つい最近まで、我が国や西方の国々としか国交を開かぬ、鎖国であったが、政府が転覆。」

新政府は西方化に向けて尽力しているとか・・・。」

リュ氏 B

「ほう。よく知っておるのう。その通りじゃ。  
ワシは、あの国がこれからドンドン国力をつけ、強国になると考えておる。これから見物じゃわい。」

リュ氏 D

「あの程度の国が強国になると？バカをいわんでくださいよ。」

リュ氏A

「まあ、そんな外国のことは置いて、今は目の前の帝位について話しましょう。向こうの要望通り、イブン・ハサドを閣僚に入れたことで、イシュウ、アラ教徒の協力を得れただろう。ウグイル国や、シン西部を掌握する足掛かりとなる。」

リュ氏E

「イシュウ、アラ教徒達が、我等と同格の51番目の氏族になるのも、そう遠くないだろう。」

リュ氏C

「しかし、51番目の氏族に認可されるまで待つておれんぞ。」

リュ氏D

「協力さえしてくれればいい。帝位を奪った後にも、取り立ててやればいいさ。」

リュ氏E

「さて、我等の繁栄を願い、乾杯でもいたしましょう。」

リュ氏A

「では、

乾杯！我等がリュ家に栄光あれ！」

「乾杯！」

グビッ





歡喜（前書き）

朝廷の数時間前

ランファン

「陛下、今日発表なさるおつもりですか？」

リン

「ああ。そのつもりだ。

お前やチャン家の皇女との約束を破るわけにはいかないし、オレ自身もあの制度を無くしたい。」

ランファン

「反対する者達は、現れるのでしょうか？」

リン

「わからない。言ってみないことには、な。」

「……………」

「なんだ？不安か？」

「……はい。」

「お前が不安がってどうする。お前には、常にオレの隣にいて、オレを支えてもらわなくてはいけないんだ。」

「は、はい！勤めさせていただきます！」

「なあ、ランファン。頼みがある。」

「はい、なんでございますか？」

「朝食をもつと持ってきてくれ。」

## 歡喜

リンの突然の発表によって、宮廷はざわついていた。喜ぶ者もいたが、そうでないものもいた。

一族を減らさない？

そんなことをされれば、潰された者達を引き込み、帝位算奪に協力させることも難しくなる。さらに、潰された者達を一部だけ取り立てて、残りとの差別を作り、一族内で争わせ弱体化させ、我等リュ家が支配しやすくするということ、あと、覚えていないが色々なことも難しくなる。

そんなことは阻止しなければ。  
何か言おう。何か。

多くのリュ氏が いたしかたない と思っていた矢先に目配せに気付かなかつた男が声をあげた。

リュ氏D

「陛下！」

リン

「ん？なんだ？発言を許す。」

リュ氏D

「この制度は「働かざる者食うべからず」という、この世の常識を基に作られた、効率的、かつ伝統的な制度でございます。遙か以前から続けられ、さらに我が国に貢献しない者達を除く、この国のための制度を、陛下の一存で無くすのは、如何なものかと考えます。」

場が静まり返った。

リン

「お前達とチャン家などは親しいのだろう？何故そんなことを言う？まるでチャン家などに滅びて欲しいようではないか。」

リュ氏D

「え、いや、それは、そう思ったものでございますから……。」

チャン家などの貧家出身の者達から、冷たい視線が向けられる。

「愚か者めが。」

老人がぼつりとぼやき、途端に大声をあげた。

リュ氏B

「控えよ！これは、お主のような陛下の大御心を理解出来ぬ者が論じてよいことではない！

下がりなさい！

陛下、何もお気になさいますな。あの者は愚鈍で、とにかく声だけはあげる無礼者でございます。」

リン

「う、うむ。」

リュ氏D

「も、申し訳ありません。

では、これにて。」

そついうとすぐに退出してしまったので、止めることも出来なかった。よほど慌てたのだろう。途中で退出するなど、普段ならあり得ないことである。

リュ氏C

・・・あの馬鹿め

陛下。」

リン

「おう。発言を許す。」

リュウ氏C

「かつて、ジユ教を信じる「ジユ者」達は、昔の政治を懐かしみ、それを正しい政治と考えました。しかし、彼らが生きた時代と、彼らが夢見た時代は違っていました。そのためジユ者達は政治上の様々な問題を解決できなかったのです。」

政治は、それぞれの時代にあつたことをするのが1番なのです。過去がどうであれ、今は違います。我が国は豊かになり、「働かざる者も食つ」ことができる時代となりました。どうして、過去に捕われ、多くの人々を害することができましようか。」

わたくしは陛下のご意見に賛成でございます。

その御仁によって、天下万民、周辺諸国は、シンと陛下を褒めたたえ、服属するでしょう。」

リュウ氏E

「わ、わたくしも陛下のご意見に賛成でございます。」

チャン氏（メイ・チャンの方）

「異議はございません。」

クエン

「それこそ世界の覇者にふさわしい行いでございます。」

「陛下に賛成でございます!」

「異議はございません!」

「陛下万歳!」

「シン国万歳!」

「陛下万歳!シン国よ、永遠なれ!」

宮廷は歓喜の声で満ち溢れ、リンやシンにたいしての賛美の声に包まれた。

ランファンとリンはホッと胸を撫で下ろした。

歡喜（後書き）

クエン

「今回の私の発言は一言だけだと?！」

リー

「まあ、当然だな。主人公ではないんだから。」

クエン

「なにい?！」

では、一体誰が主人公なんだ?！」

作者

「決めとらん。」

「!!!!!!」

## 操り人形（前書き）

「リンが勝手に氏族減少の慣習を変えさせたらしい。」

「誰も聞いていなかったのか？」

「ええ、母親である私にすら言っただけです。」

「それは困るな。自分がヤオ家にとってどれほど重要な存在で、手なことをしてはいけないということを知ってもらわなければ。」

「リンが皇帝のうちに、我がヤオ家の力を確固たるものにしてもらわなければならぬというのに、あやつは理解しているのか？」

「外国にいた数年のうちに、大切なことを色々忘れてしまったようだな。」

「なに、また思い出さしてやればよいのだ。」

## 操り人形

ここは宮廷

リン

「ふう、まだ政務には慣れないな。」

ランファン

「そのうち慣れます、陛下。

また新しい書類です。」

リン

「ああ、まったく。皇帝も楽しじゃないな。」

リンがため息をついていると、衛兵が扉のところんやってきた。

「失礼します。太后（皇帝の母親）様からの使いが参りました。お会いになりますか？」

リン

「母上から？」

なんの用だろう？ふと、リンはそう思ったが、会う以外に選択肢はない。

「よし、通してくれ。」

疑問に思いながらも、リンは使者に会った。

使者

「太后様は、久しく皇帝陛下にお会いになられていないので、久しぶりにお会いしたい、とおっしゃっていました。

今夜、ヤオ家にて宴会を催すので、是非陛下にもご出席していただきたいとのことです。」

リン

「……よし、わかった。今夜出席しよう。」

使者

「おお、ありがとうございます。」

太后様もさぞお喜びになるでしょう。

では、これにて。」

リン

「ああ、母上によろしくな。」

そう告げられると、使者は帰って行った。

リン

「ふうん。あの母上がな。意外なこともあるもんだ。気分は乗らないが、むげに断ることもできないしな。」

「失礼ですが、太后様を嫌っていらっしゃるのですか？」

ランファンは珍しく、家来が入っていい枠を越えた質問をした。リンが珍しくため口を言ったからだ。

リン

「ん？まあな。あんまりいい思い出はない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ランファンが気難しい顔をしている（とは言っても、仮面の裏だが）

「ことに気づいたリンは「さ、政務を始めるか。」と言い、ランファ  
ンから書類をふんだくった。

そして夜遅く、リンは約束通りに宴会に出席した。

リンは宴会の途中で、太后の奥の部屋に呼ばれ、中に入ったきり出てこなかった。

「命を狙われる心配も無いだろう」と言われ、宴会場で待っていたランファンもさすがに気になり、様子をみようとしたところ、いきなり

「ふざけるな！」

と、リンの怒声が出たかと思うと、部屋の扉がバンッ！と勢いよく開いた。

中にヤオ家の有力者達がいるのが見えた。それにランファンやフーと同じような黒装束が10人ほど。

「ランファン！帰るぞ！」

今まで見たこともないほど怒っているリンを見て、ランファンは困惑してしまった。

「ランファン！何をやっている！早く来い！」

「は、はい！」

忙しいでランファンはリンの後を追いかけて、宴会場の外に出ていった。

宴会場は騒然となった。

「失礼ですが、太后様。一体、皇帝陛下に何をお話なされたのですか？」

ヤオ家の一人がおどおどと聞いてみた。

「特に何も言っていないませんよ？」

ただ、これから何かするなら、ちゃんと私にも話すように言っただけですよ。

そしたら、そのうちあの子が怒りだして。

ねえ？」

「はい、まったくその通りです。」

「きつと虫の居所いところが悪かったのでしょうか。」

近くにいた有力者達は口々にそういった。

明らかにそれだけではなかったはずだが、それ以上追及する者はいなかった。

「陛下!!」

陛下! 待ってください! 陛下!!」

ランファンの声を無視して、リンは宮廷内を歩いている。

いつまでたっても止まる気配がないので、ランファンは大声をあげた。

「陛下! 何があったのですか?! 教えてください!!」

ランファンの声を聞くと、リンは急にピタリと止まった。

「……ランファン。」

「……はい。」

「お前は、オレに仕えているのか？ヤオ家に仕えているのか？」

「……私は、ヤオ家の陛下に仕えています。」

「では、ヤオ家がオレに仕えるのをやめろ、と言ってきたらどうする？」

「……若、いえ、陛下に仕え続けます。」

私は、陛下に仕えるために選ばれたのですから。」

「だが、お前を育てたのはヤオ家だぞ？お前には、ヤオ家に従う義理があるのではないか？」

「それは、そうですが……でも、」

ランファンが続きを言おうとした途端、リンが拳こぶしで壁を殴り、深く息を吸い込んで宮廷中に聞こえるほどの大声で叫んだ。

「オレは！ヤオ家の操り人形じゃない！！」

「.....」

ランファンはただ、後ろからリンを見ていることしか出来なかった。

## 操り人形（後書き）

作者

「次回からやつとアメストリスが出ます。」

エド

「やつとかよ。もう「鋼の錬金術師」じゃなくなったのかと思っ  
ぜ。」

よし、これからはオレの出番は「

作者

「ねえよ。」

エド

「は？」

作者

「いや、は？、じゃなくて。」

出るのはマスタング准将ぐらいだよ。」

エド

「な、なに言っただ！主役はオレだぞ！」

リン

「いや、エド、もう違つゾ。」

作者

「他の二次創作で登場しまくってるだろう？別によいではないか。」

エド

「ちくしょー！

持っついていかれたああああ（主役の座を）！」

作者

「まあ、そんなことより、そろそろテストだ。気合い入れるぞ！

よし、まずは士気上げに歌を歌おう。そうだな。いきものがかりのブルーバードとか歌うか。

ほえ~~~~~！

.....ああ、段々テンション上がってきた。

じゃあ、ラスト！締めだ！

3！2！1！

もっとな！熱くなれよおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

## 登場人物のおさらい（前書き）

作者

「はぐい、多分場面が変わると思うので、登場人物おさらいだよ。」

## 登場人物のおさらい

リン・ヤオ（ヤオ・リン）

シンの皇帝。

ランファン

元々リンのお付きの者。階級は郎中令。

チャン・クエン

オリキヤラ。シンの宰相。

リー

オリキヤラ。チャン・クエンの友人。穏やかな性格の持ち主。地位は不明。

リュ氏ABCDE

オリキヤラ連中。リュ家の者達。それぞれ性格があるっぽい。

太后

オリキヤラ。リンの母親。基本嫌なやつ。

イブン・サハド

オリキヤラ。シンやウグイル国での地位向上を目指すイシユウァ

ラ教徒達から推薦され、リュ家に閣僚に据えられた。地位は大行令  
(外交を司る)。  
彼自身イシユウ、アラ教徒でウゲイル人。

作者

作者のこと。

テスト中の作者

死にかけている作者のこと。

その他

登場人物のおさらい（後書き）

エド

「オリキャラ多くねえか？」

アル

「しょうがないよ。原作には元々、シンの人は3人しかいなかったんだから。」

テスト中の作者

「寝かせてくれ……。」

## イシュヴァール（前書き）

ラジオ放送

「ザ・・・

マスタング准将が本格的にイシュヴァール政策に乗り出し・・・

ザザ・・・

将来的には東方シン国との鉄道交易を開始したいと・・・

イシュヴァールは交易の拠点として…

ザザ

すでにリン・ヤオ皇帝との条約を ……」

というシーンが原作にありましたので、これに至るまでの経緯を書こうかななんて、、

ごほごほ！持病（？）の風邪が！

風邪をひきました。皆さんもお気を付け下さい。

## イシユヴァール

ここはアメストリス、セントラル。

今日は、グラマン大總統と面会するため、東方部司令のマスターグ准将がセントラルに来ていた。

コンコン・・・

グラマン大總統の部屋を誰かがノックした。

「入っていいよ。」

返事後、ドアが開かれて、一人の男がグラマンの机の前まで歩いて来た。

マスタング准将

「お久しぶりです。グラマン大總統。」

グラマン大總統

「うん。久しぶりだね。」

「今日はお願いがあって来ました。」

「うん。呼んでもないのに来たってことは、そういうことだよな？  
で、用件は？」

「実は、イシュウ、アールでやりたいことがあるのです。」

「何？」

「聖地イシュバラの解放です。」

「え？聖地の解放？  
それはもうやったじゃない。」

「はい。表面は聖地おもてめんイシュバラを解放しました。しかしまだ不十分です。」

グラマンは不可解な顔をして聞いた。

「どういう意味？」

「当然ですが、避難民はまだアメストリス政府を信用していません。だから聖地を解放しても、また何かされるのではないかと恐れ、戻って来ない者が多いのです。」

これでは人口が不足し、復興もうまく進みません。しかし、他国の目があると、安心して戻って来る者も増えるでしょう。」

グラマンは額にシワをよせて尋ねた。

「で、何がしたいの？」

「イシュウ、アールを中心に、シンと鉄道交易をすることです。」

「!?!」

グラマンは一瞬驚いたが、すぐに元の落ち着いた表情に戻った。

「思いきったことを言うね。」

シンは自らが認めた国としか貿易を認めない。もし何かことがあれば、上客対応に慣れているシンに嫌われるよ？

シンに嫌われるってことは、大きな意味を持つってこと、君、わかってるよね？

第一、シンが認めてくれなかったらどうするの？

断られて赤っ恥かくのは私達だよ？

認められる自信はあるのかい？」

マスタングはグラマンの目を真っ直ぐに見て言った。

「あります。」

「根拠は？」

「つい最近皇帝に即位した、リン・ヤオとは面識があります。彼は信頼できる人物です。」

私を通商条約の交渉人や、外交担当にしてください。こちらの事情を説明すれば、応じてくれるはずですよ。」

「……………え？根拠って、それだけ？」

「はい。」

「……！」

今度のグラマンはさっきよりさらに驚いたらしく、少しイスを引いた。

「君は、本当に思いきつたことを言うね。」

たったそれだけの根拠で、私に条約を打診しろと言うの？」

「はい。イシユウ、アール復興にどうしても必要なのです。」

他国、しかもシンが威信をかけて条約を結んだとなれば、少なくとも聖地で我々アメストリスが手荒なマネをしないと、多くの人思うでしょう。

それにシンとの交易では、巨大な金額が動き、富を手にするチャンスがあります。

その利を求めて、聖地に戻って来る者もいるでしょう。」

「しかしねえ。……………」

「。。。」

グラマンは考え込み、なかなか返事をしない。

しびれを切らしたマスタングは、口を開いた。

「私が「約束の日」で働いたことに対する対価、とでも考えて下さい。」

「え？」

グラマンはそれを聞き、ククッと、軽く笑った。

「面白いね。  
等価交換ってこと？」

「はい。」

「……………」

グラマンは顔を伏せて考えた。  
そして少し経って、

「わかった。近日中にシンに打診しよう。  
君へのご褒美ってことだね。」

マスタングは少し嬉しそうに笑った。

「ありがとうございます。」

では、お忙しいようなので失礼させていただきます。」

「うん。わざわざ東からご苦労だったね。」

マスタングは司令部から退席し、施設前で待っていたホークアイ大尉と合流した。

ホークアイ大尉

「閣下。お疲れ様でした。」

マスタング

「君もな。大尉。随分待ったろう。」

「いえ、予想より早かったので、あまり長く感じませんでした。」

「そうか。」

マスターグはにやけながら、車の助手席に乗った。

「大尉。東方へ帰る。駅まで送ってくれ。」

かしこまりました、とホークアイは言い、車に乗り込んだ。

「・・・・・・・・閣下。」

「ん？なんだ大尉？」

運転中に、ホークアイが聞いてきた。

「グラマン大總統から、よいお返事をいただけただけなのですか？」

「どうだったと思う？」

マスターグは窓の外を見ながら言った。

「もし、閣下が自分の信念を通せずに、諦めて戻って来たのなら、私は閣下が道を踏み外したと捉え、後ろから撃たなくてはいけません。」

ホークアイが真剣な顔で言ったので、マスターグは苦笑しながら、

「ハハハ、冗談だよ、大尉。  
うまくいった。近日中にシンに打診してくれるそうだ。」

と言い、ホークアイの顔色をうかがった。

「そうですか。おめでとございます。」

「ああ、ありがとう。」

まったく、それにしても君は恐いな。」

「ご自分が私に託した命令です。」

「そうだったな。」

大尉、これからも背中中は君に預ける。もし私が道を踏み外したと思  
つたら、遠慮なく撃て。」

「はい。」

そのまま車は走り続けた。

マスターグ

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ。しまった。」

ホークアイ

「どうかなさいましたか？」

「東方に帰るための手配をしてくなかった。参ったな。」

「ご安心ください。先程手配しておきました。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・いやあ、君がいないと、これから恐いな。」

車はそのまま進み続けた。

## イシユヴァール（後書き）

シン国にて・・・

リー

「なにやら昨夜、陛下はお怒りで、お叫さけびになられていたらしいぞ。」

クエン

「どうせ酒でも飲んで、今まで溜めてたことを吐き出しまくっていらっしまったのだろう。」

「ダメだなあ。お酒は二十歳まで禁止だぞ？」

「いや、なにやら太后様とお話したあと、お怒りになったらしい。」

「ああ、なるほどなあ。あの人ならわかるな。」

私の「法律がなかったら殺してる」ランキング第1位だからな。」

「きつと陛下のことを小馬鹿になされたのだろう。あの方はそういうのが好きだからな。」

「いや、陛下は自分のことを言われても、あまりお怒りにならないらしい。」

たぶん、配下のことにに関してなにか脅しっぽいことを言われたんだろつ。」

「どこでそんな情報を知った？」

「私の食客（簡単にいえば居候<sup>いそうご</sup>。学者から旅人まで、好きな人物を雇って養う。）は3000人を超えているんだぞ？陛下の性格など、待ってれば食客のほうから伝えてくるわ。」

「民の税金でずいぶん好き勝手なことをしとるのつ。」

「民の税金ではない。私の領地や地位によって得られた私財だ。」

私財をなげうつて、国のためになる人物たちを養っている……。ああ、なんといい素晴らしい忠臣なんだ、私は。」

「ただ人雇ってるだけのくせに。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0715v/>

---

新皇帝リン・ヤオ

2011年11月16日20時15分発行